

鷹の目の狩人



文庫設立と活用

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

城郭研究と資料の収集は中学で山鹿流秘伝書『武教全書』を手に入れた52年前に始まります。富原文庫の設立の動機は平成10年上田商工会議所の依頼で「真田太平記の舞台 戦国時代の城と合戦絵図展」を開催した際、書庫が東京と大阪に分かれ運営に困難を極めたためです。展示会は池波正太郎真田太平記館開館記念で、地域活性化の目的で商工会議所の最上階の大ホールで開催され、真田戦史に残る戸石城がパノラマのように広がる素晴らしい会場で1,300余人の方が来場されました。展示は武田信玄の武将としての真田と、滅亡後、大坂の陣までの活躍を古絵図と錦絵130点余で構成し、多くの方に戦国ロマンを満喫していただきました。

平成12年に東西書庫をまとめ、富原文庫として、板橋に設立しましたが、絵図を見るスペースがなく、平成20年群馬県安中に博物館を建設、10トントラック1台、3トン5台に上る資料の整理が半ば完成した平成22年、文庫に於いて、「群馬開館記念 上野動乱絵図に見る戦国城館展」を研究者限定で開催しました。この展示会は上毛新聞さんの紹介があり、地域の教育委員会や研究家が約百名来訪されました。この会場に、TV東京の「開運なんでも鑑定団」が来られ、城郭修理絵図という幕府提出絵図5枚で番組に出演しました。司会の島田紳助さんの機転に舌を巻きながらも、この人気番組で15分、城の紹介をしていただきました。TV効果は絶大で、全国の骨董商や古書籍商から資料が集まってきました。

平成24年には三洋グラビアの原 敬明社長のご協力により、伊那の同社みまよせホールで「長野県の城絵図展」を開催しました。関東グラビア協同組合理事として大活躍される原社長が、工場の一部を地域に生かす目的で展示場にされ、その企画について、ご相談いただき、当初、印刷技術史展と考えたのですが、資料の絶対量と地域活性化のため、伊那に密着する展示として伊那古城絵図展としました。

城絵図展は後に長野県全域に広げましたが、伊那伊豆木小笠原家の軍学者が寛政年間に調査した絵図と明治5年に陸軍省築造局が全国の城郭の存廃調査した絵図の長野

県を初公開しました。人口7万人の伊那市で800人の来場があり大盛会でした。展示会は伊那異業種交流研究会主催、伊那商工会議所共催、伊那市、伊那市教育委員会後援という体制で、NHKや中日新聞が報道、伊那毎日新聞、伊那ケーブルTVが展示会紹介とともに、企画した富原文庫の特集紹介をしていただきました。

一 の展示会は経済人として卒業後の最初の取り組みで、
二 特長として、古城絵図に現在の調査絵図を比較展示したため、NHK画面に突如現れた217年前の古城の姿に魅せられた方が驚いて駆けつけられる等強力な刺激を提供し、今も、伊那の研究家により、絵図解明から未知の城跡が発見されようとしている状況です。

明治5年の陸軍省城絵図も初公開でした。この絵図は平成20年フランスで発見され、調査当時すでに軍営となっていた松本と上田を除き、幕末に存在した長野県10城郭すべてを紹介しました。調査規模は有名な正保城絵図を超える、日本城郭史上最大の調査の記録です。しかも、幕末に現存した状況が記録され、破壊される前の状況が知れるものです。高遠城跡についてはこの絵図検証のため、現地調査を行い、現状図を記録し、比較展示し、城跡の現状と今後の対応について報告書をまとめました。

コレクションの活用事例を紹介しましたが、三洋グラビアさんの取り組みは、今は死語となった企業メセナを思い起こさせました。企業も個人も未来のために何を残せるかとの問いかけられたように感じました。



三洋グラビアみまよせホールで昨年9月に開催された「長野県の城絵図展」

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH